

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

狮子門傳書

特別
^5
6590
96



俳偕規矩內祕錄

目録

- 一曲當即地 一誰名より 一七名ハ附 一延白
一附合地 一五五五五五 一二人 一唐宋 一三句味合
三一日帝曲 一絶賀五五 一子持 一死活 一搜集の
四一藝向化 一筆手新 一时宜 一二句一空 一平白バ筋
ユ一茶膳あ後 一振 一時引 一墨字通語一李子福。高浦
六一上主名人 一寺ニ 一时節 一號將のは一族句。小島
七一在地屋 一四口自 一天お 一対合二方あ一志の裏句
八一雅俗 一翠り 一画影 一附合附漏 一事事家狀
九一溫故知新 一月花 一対相 一句の変化 一撰集
十一切字 一附句 一七口石 一季の用 一兵式。付合難活
（とせ。金秋。より
而は。毛。松子。起居セ名也）

右四十條

八五
6590.
96

狮子門流諸少主



曲當即地

一首以は骨肉とふ 一徳修と引え文中ひや生の行草の三段と
以ほすよきよ曲當即地の三段と人ふを中ハ曲へ行が節と
生の地えれい曲當即地ハ一目あくすすし鳥の地ハ玉り弓弓で
13かく一翁も管不地とれむとくもすと是或ト食る歟
の凡情も或ハ多才の凡あも蟲庭万殊の安情抑ひ已ク極
化とけもすゆも終ふ主事と以化活の争生とハ一モヘ化
もすゆもすゆと食る歟とを言ふ事自生た多事万化を
と括ひ又とくと食る歟とを言ふ事自生た多事万化を
と括ひ又とくと食る歟とを言ふ事自生た多事万化を
と括ひ又とくと食る歟とを言ふ事自生た多事万化を
と括ひ又とくと食る歟とを言ふ事自生た多事万化を
と括ひ又とくと食る歟とを言ふ事自生た多事万化を

付と地のけかと音一曲常とふふ威の教或集編
傳の内とはれもあてらきてはぬりともと先と常
とも曲もゑれとせぬねいをびむもえよすくはをと
川近るもきうども一季あるく迎う

桂の包とうちのそりと

お代の毛り一曲のえと付

けうげあんお詫の詠白子すもゆかくも一のればま
る一の臂の己うこすらうたうれを歌の起る翁代
と是くはきとしを少へ桂も桂の歌を庵と云て了
先を地のうな秋付するくよみ歌はるどりふるもを
たれぬが地の翁よりお詠常父の唇う牛生之地
をうやまとひのく

地

お代の詠はりあ版とあく

はる桂の曲上うとそく歌は桂の歌室う可^{ハシマ}小観

首

お代が二のまよに付と

けうと底すあ版とせうとそく歌は桂の歌室う可^{ハシマ}小観
翁のまよとお合とそく歌は桂の歌室う可^{ハシマ}小観
歌一合く曲を又底もあらむ

曲

お代ハ玉人首とす御くおく
けう一の上の仕立りく曲をてハ附う

附合地

月の秋
の往
きをも候
て
かねの所
へ不^レ能^レ也
とあらへ
ゆきを
まわる
ちのゆ
ゆかと
れてせ
れど其の所
か

同前

わくえんやもじけ。月のつけ
れじりは、りえもやめ
せらわくえんとまくらゆとおとね
くふくすこわくえんとおとね

あひたるのもと病びたり
あのわらわん川のわらわん町

四

老の年小丑辭りこまづまうひ
あまうけふ至る侍ゆれもくす
曲ハ付合よハナノ一の化力也トテアの心お七名のを
情よ仰みよといへども起情ハ起生ミテアハ答答モ
付合之曲ハちの里ナリて弟ハ所ぞよし生モ也

卷之九

一處より、妹のことを下へ鄂ふね、魚の身を下へ譽
妹の身とも思へぬも、妹の身とも思へぬも、
持てゆき、妹の心も、妹の心も、妹の心も、
妹はゆき、妹はゆき、妹はゆき、妹はゆき、

波多乃川嘆子あらそむ仰る江元

逐向と夕見の時とて嘗る遠き晴日元氣をもせ
神のみのめりとすよ

夙夜のあやまつて風の聲のあと

さへうきし再びあくよ上立ます逐向近御の風音
夕見やておぬ小河の匂いを含むともあこを出
再びやさしかたるれ行の風とが不原の一字といふ神の
の逐向とモ

原ふうやくわや家裡の聲ぢりゆ

たえ

あれぢ後

歌のりや多かうむむ終りうち

たえ

ひうの序や序の八方出でりゆえや多かうむむ終の序
おぞ鳴とうは序ハ多かうむむのをう終あつまふテ原

形定とぞとまもと御のたとえほのまひとすだりん

始とひとまくとまくと

原ふうやくわや家裡の聲ぢりゆ

はすり出先、仰申かうゆう不成物とぞくあ候石
原ふうやくわや家裡の聲ぢりゆえや多かうむむ終の序
えんあく、斗十ては産尼御小うゆ一キくればくじか一で
くゆた一か一のゆうて若とく一かの邊をとそをゆう御傳
のゆ傳をもひす。一かとくあとハリとおのゆうて山支をし
まくかハ此情ゆうゆうれハ情す一入でれかくれ御傳傳
行重伝聞かれてお改生よせられ、行重傳

原ふうやくわや家裡の聲ぢりゆえや多かうむむ終の序

上主名人

一上手の匂ハキ葉ヲテ鳥ト名人の匂ハ鳥痴カ
侍多モ叶人モアリトシルモ色也アリル乃
シモシカニキモヘ

培羽の上萬トキヤ志モリ極のモ
上手ハ培羽の目知度シモヒタモナリ
培羽の歯ノ五トキニ通の角サセモリ且痴也
カモスムカニモナリ大化ノ日モ
アリト日ヤ月ルカモカ林のル
モホニモスムのモカニモ情也アリ候ニカニモナ
リモモモ

折シトモアリモナリぬ樹のモリ後者

けり趙白雲を対象モ趙白雲アーハ也モ良也アリ
子承れ後日趙白雲と至るモ既ト趙白雲アリ切考の業シ
乃は既知

一五枚の小切紙と及比の絢也く皆白雲の業也アリ
矣アリ見まくシレホのモ

多アリ見モ及比と及比トテ予定若乃
其事の如也トク及比と及比トテ予定若乃
の信達小半年の事アリ先々も未アリと延向
立れども先手に情下り入史テ云テ即刻起て全
不内也と云ヘテ後まハリ延向也アリ仍のモアリ
既ハ勿稀シテ虎のはの禪もアリテ候モヒヤドテ
笑すと行處又得く門までさうする事あり也

金爲シヨリ是處家ふの心事とありてあられんハム
はともあひ爲めにほのと傳承の爲めあらうとおこし
をえりぞきり居かどもすあらう

辨信 信中辨

一卷句小辨信の獨創と云ふ辨傳と六數字にて妙矣
信傳と云ふ事やあつて御一聲を加減する事ある
事無事不思議である

はうるの所とゆき、信傳れまわあやと柳子事
あましげぬると云ふ事信と云へ知る事
於附合の辨、少もほゆきとあはれ、且辨傳と云ふ事
而ては用一か云辨と云ふ事でちぬり信中と云
きよこ一辨すあら辨と云ふ事から

温故知新

一五五十九年の内情と云の所も只一字二字院
あくまでも一詞告ぐ乞う辨へても居ます
多分の事かと云ふ事と温故知新の所とも
おもむりりと云ふ事と云ふ事と云ふ事
格うけと雑もかく、あとは四
ち五年ハトノハキムと云ふ事と云ふ事
云詞ハ一りを用ひ云ふ事と云ふ事と云ふ事
云ふ事と云ふ事の二字まで一つの紙のうちをもつて不
をあらう

切字

一文字の切字と云ふ事
一文字の切字と云ふ事

名のすゝみを切字のゆき、ひめうらをとくと
キルがやまととくと却てむちのあとかとこす
ゑあくあく切まるくとあるのあくはあらをとくと
や字のうへ變りぬまくとくとほきく名ときてちが大
口へるとくとも生とくとけとくとふかめに古ケガ
の付をはずくみう切字へるも五へ一是六の字で
れやれり

タラ角や船ハシウ（のぬ）
持ホーもよかヤサのちく（ノ）
上のゆすハのまかて渭をそそぎトの切字法と切字
ハ皆云持事、まは主毛ハ先とねと名の字と

難多白

一難の多白ハたかをたゞし名ふかとハ極多の多白吉
そめよひよひ

おまうり軍主小兵アト吉モ山 莊ニ
はく大川死一曰下の五ド一吉モ山ナテナリシテ浦の
浦とも五ド一吉ニ曰下アの浦と文アキモ山ナテ多白
え文ヒシ多白ヒシテる時を考キテ次高の浦とハ沢
ぬまか小折は済テの浦ハおまうも軍主小兵アト吉
はく大川死一吉モ山ナテ多白の浦ナテ

キム

一玉若或ハ志のあらハ情アリ入る。をもかハ多白
入念エヌをたまし

義の事すと切字の事、いふうもあつてこれ
キレやうと切字の事と云ふと却てめぐらの事と云ふ事す
モアシナリ切字がくとあるのあきハあるを申す
トシテ申す事とイモ申す事と申す事と申す事と申す事
ヨリ申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事
の仕事はすと云う切字へるも五へ一是六の事す
申す事

タラ便や様ハ以テ(のぬ)トナリ
持ホレ申す事や作の事モウ即
上の切字ハのままで消えこそすきの切字法と云
ハ皆云持事、まゝ主を不思とねて書ひの事也
難易句

一報の事ハたゞをたゞにあふかとそハ極るの事古
今わざとすと

大川死一回下の五と一を山山山山山山山山山山
浦と申す事と申す事二回次アの浦と文和と申す事と申す事
え文と申す事と云ふ事と考えテ一次高浦と申す事
ぬ事と申す事と考えテ一次高浦と申す事
浦と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事
浦と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事

一报若或ハ志のあうハ情り入る事と申す事
入念ノエヌをたまし

志上若安句

経文

一画聖人の名号のサードはそひは傳文にて後にもす
ちかくゆく

神の洞と謂ふゆかず。後よ

はかうて日ひもんのゑも

又衆人の名を入らぬとま達ふえす。前よ

ちうとの名やほりと圓塚

口

利休をも圓塚とも名

又も扇の松把ひとて。後よ

此の御也あやめや。祐の神

口

けりに跡をうちや因れよ。画聖の御ゆく名ゆくし

かく画一作

行ゆきの松把よ。福の抄をし。口

又鉢の施升を因所代の扇子と紙のせと見の形と見え
ぬれよ。あく後也とましまます。小笠原と玉手しも
相枝遠の三子も越向をもと。三子越向をもと見え
云々。之はおゆくとやふ。

生持や祐がんをゆきをまうはす

又火の取事のあら陰を候

時の名をせられて。火の事

西子の名をゆき。うえをぶのるを。又玉手。後よ
あもう後よのことをうて。余情をもとすよ。わく

そとあ

一家の事とおにづら。後よの事。前よりみますよ

脚の表の事と云ひて
脚の裏の事と云ふ事
ある事考だ

卷之三

はるひをかねて少人ひ立候ふとちたまへ、おののをもくに
に木の子の枝を立てても、序章といえり。皆まほきの
さゝめ事時と起らかまへん。ハモカクアリ松のまき
はれ。まきのばらとまきをむ

九

一組の新字あるまには必ずこの字があるからそれから字を
書く上手な筆でも手をえねばいい。集のいやうかとよもよも

乃ひありの事高とひまくいふ情今まにかく
ゆきあと筋の筋高とまくとを教字と云ふと
ゆきえり未少々假るに一筆二字三字の内やも
及一筆の筆を一筆至形四字と一二字と云
室と此ハその教字と謂ふは文字より假るに
れされよたがちん字ある筆一筆工文を之
一筆を成さしむるをのへり

山の事の一事と云ひめぬハタ凡て

はねり椅りと起ぬる色へされとももそりぬ半のま
あらの身合ひ椅りぬを又差へ

在して云々は、其の事小御内侍の、いせわる

あ代のあく母の
泣

は御萩もさへとてゐる。まことにんとおひら

俺の下に落つかれてはまぬ、も

タマコアヘタマアノタマアトタタマ
のタマアタマアタマアタマアタマアタマア

はおはの下にあがまと云ふと若れておはまく
をゆすりとはてははるのをちのをゆき
えといひてあゆよせんり

老松の身を若くするの事
は凡それ年を重むるの柳
の

は銀子が彼の手の都合にあつた

南山のあや老人のねんきはのゆきめ
ホルの上にて立了款字考より波瀬也

説あらわしもくほの仰おほきを
往むかるの多おほいの事ことあつ
たえ

はねきのあーう

報の裏の風景を新しく以て、當年も見る所
多きものなると存る。詩を傳へて、御中止
されしをも、二首ある。

竹書や山の事は大いに
帝国

正月二日
晴
北風
寒
天
氣
晴
暖
和
天
氣
晴
暖
和

おもひあはれ、うるさい
おもひあはれ、うるさい

はくの而ナシと付毛

移るもよや垣のをぬくに 楊星

ぬくにむくに山蕉のびび 庄え

楊星

け絶筆字に平の付毛もはねあ
立佛またじとかりてうるは 六
河源のまことふた葉桂邊 庄え
け絶筆の立佛とせふとらの信持より
大寺の愛りしかくもすきとく風のあとすも
先を集め宿とそく延向とすもと教字とすも
ゆうゆうと脚筋がけつる堅因篇とすもとせ
曰ひよ諸事とぞそぞと若日はと集め宿の延向とす
て而入しうれとほらようあ人のちか

語の二字アラナ一自ニハラムのモ達の二字ハ筋目
井目ナリと音ニテ原えいと一モ取ニ達ヒル空唐
キミと門あるのモヤモタ往の筋アラナ
然アラナモモ井アラナモタウ

秋原の字アラナ一モナの日

け絶筆とぞそぞとせふとモ日取ホモアモ出だ
かく壁紙の裏アラナモモ月ハ筋アラナモトモ不
画アラナモモモモ月ハ筋アラナモトモ不
又曰居と浦モ小笠ホのタカアテ名の太をアラナモ
よとくの上モアタアモモアモモアモモアモ
ぞねハ付毛ナリ家アラナモモモモモモモモモモ

名アラナモモモモモモモモモモモモモモモモ

鉢草 庄え

金の
木

は狐生すゆ

そよよ御座起るや牛の身

里アシタカ也下れも味亨アヒ一蕙

日ヒたえ

は狐死アシタカとは物の里アシタカもんてとん

游アシタカ一旅アシタカ門の裏アシタカし

山アシタカがよほ梅角アシタカも小の青

たえ

は狐アシタカも一おもとつあ御アシタカと魂アシタカとえて山アシタカへとハ御アシタカ

うもくアシタカはるのはるきととく

撫アシタカ達アシタカもよや山アシタカのをねつし

旅アシタカの行アシタカの日アシタカや梅アシタカ打

は狐アシタカもと猪アシタカとアシタカ行アシタカもゆきの起アシタカらアシタカとお見

エアシタカもと

ま

一キアシタカて多アシタカいえのあアシタカ一體アシタカすも乍アシタカよ多アシタカ成
蜀アシタカと云アシタカ集アシタカのちアシタカよ一アシタカて鹿アシタカもとアシタカかふさアシタカ發アシタカす
かアシタカ一アシタカて將アシタカて石アシタカかアシタカりアシタカをわアシタカよもアシタカ一アシタカすこアシタカ一
將アシタカの場アシタカれも附アシタカきもとアシタカよやアシタカあアシタカに信アシタカと號アシタカスアシタカめと
廣アシタカきと狹アシタカくと將アシタカきと廣アシタカきと狹アシタカくと要アシタカとアシタカよこアシタカと要アシタカと
すとアシタカよこアシタカと要アシタカと要アシタカと要アシタカと要アシタカと要アシタカの聚アシタカ
それうちアシタカねアシタカきアシタカにアシタカ一アシタカかアシタカて小アシタカと野アシタカもとアシタカはも
こもアシタカも変アシタカ代アシタカのあアシタカもゆアシタカはもアシタカもあアシタカ新アシタカ年アシタカの
名アシタカ一アシタカきアシタカと私の意アシタカもすアシタカ一アシタカ藝アシタカ也アシタカよ立アシタカと荷アシタカ
もも西アシタカ一アシタカ交アシタカは口アシタカまアシタカ年アシタカの年アシタカ合アシタカお錢アシタカと附アシタカ
すアシタカもいアシタカと持アシタカもアシタカの意アシタカも

又
未乞之日
五
二

新宿の宵の牌 桃の舟
日暮の小舟 乃達

め引上るる一地
名の草木が多き處

おまかで月の令状をもつて

官勾筋と號へば即ち之を爲む
平之久乃所爲也故云也の云既と今爲
傳之乎其事之有無乎

又余りとらぬ事なし

山の年々すらのあくまでも
けり山の年といへる山の丹年、埋ま集めてちがの名
へ下の五文字をまかえくと「木立の山」れふ底
はあくまどきんてゆゑてさむじれよ「又中三
蜻蛉のけりけりの蟋蟀の名

帝之以爲之
則可也

卷之四

一月一日は一月の始まりにてさうとひの月よりれ
わちるる時は生れ一月かくの御の御と名づけさう
御まつり能く御小名る御年までハシム
多き事あるべく切字が、教字も御すてあゆゆ
毛（は）はぬむ角を（かく）むしむる日、や（は）い
タ（た）は（は）わらへ被（お）そき（そ）の經
く（く）ま（ま）は（は）時（とき）に（に）く（く）自（じ）ら（ら）きと（き）よ（よ）しわ
あ（あ）う（う）は（は）う（う）月（つき）も（も）ね（ね）せ（せ）の月
生（な）た（た）一（一）生（い）ふ（ふ）活（か）の心（こころ）あ（あ）ざ（ざ）た

本居宣長

一すくいゆく多と今あらまうへやああこはせこある
のれはすくとくやくわひよかをのきくゆるの今

舊了。何不使他到此時，布施他一念。

卷之九

一矢奉らる。因まえさうゆるにあらふのをも
あらむれども。因白さうえよする
次のあとも。ものあけり。の

一日もハ凡能の師もさのゆきとぬまをモ月
ももひとむらにて之のゆきれよりあはれ
ち教みるに先八月の事より之ともおもむきのち
さうりてせりとまそテテ底の風があはせ
日の氣とあはげはと傳て多氣の氣なりハ却れ

のせら因シて自とて二を二日をたまひ貞季
式の一徳し又月のうするより神のみに付仰方
リテモ

希りゆれども終ふよりわ
とくらる名育す節らタ日ゆとあく時ひるを能
のうる終のり合をなす一これと並べぬ不終の月かけ
きも九月をうとうと

月の音葉あらね、行く
かくけた一節のとくはんすすくは月のれま
あうのあらねのよそくわくし
古はくもむち西もの像ゆ
は政経をぬとせむ先

は六月のるし轂の事も七月の事廢れてうる汗
立くかくけとて浦旅すのをも
孤立河えく月うは一
はる月旅とくに名の事のうち自に
行後もやむびくわばくわ
入れ高く山うみやへる
ゆく日ゆくもとあとあも

約束のうとくとむにつけと
まくらのまゆ

ふまもとくよく御月

かつての如きを一覽のねども

۳۵

一行りへ送りとあら
たゞへ仕け事とあふか
なせぬのあつてハ所のせうをと紫
モアツメ自ひ初緑あ
されども色とすあま自
ひ生え根ゆるの送りとあれ
たゞへとものもとさへと一とあるのひと

七名八術

一
附方八
折子
七
七
背
詣
折
附方八
附方八
附方八

文選

あわの角くのすあつ
とおもて

主徳あるの東海山海の前よりのまとい
とえりとも徳とほくも

時至きよしむを此の入をときて

時至ときてはるとのそとて多し人多し因
らかにけぬかに是とハ和の一人よして時至と
そとてはるのゆふくのりなよあれあれも
そのせくそ人の心地もそのせくそ人のゆねも一往一復
のは合てやは時は空をとゆすよと或はう自
の時を月をわらひをとれど絶絶ゆきよもそるそ
月をかうするあくもあくさりけしてはるの自能
ねよをよしとて一足下毛とぞうえまよ一足の
度とえ合はれしとれそ一足の脚をあれと一足の

ゆくれりあくもかくとてはてはとては

小もの浦も自由とみの瀬

はりちある時をかくとんじゆも仰へとたん府の達人の
は合とくとくあらのふれぬれを二う位をものあつて
あらゆくはありとすゆきのゆくはあらゆく

え

え抜きもゆくあまくは

かくあくと兒子のうと達人の縁のうと是あと時
空の一はとあがり

ユモトキテ或る事、りて舍あまくは

達人のアモトキテの穴つぐく

ちきのあくとすはくよもゆくて多々とま

三月以降とてひうへ

あわく飽く日下不詠と秋實て
とちあくすすすしてもよむ向むしれすそりの
時をそんハ終す極むるすを

時ふと海船至れすと釣事皆晴のゆきし

時子節といまを夏候すと一月の行すと
時子節といまを夏候すと一月の行すと

天わざれぬかすと暖よりあく遅々のゆれも

西野 挿りすみまゆーの寺

吉年 入江もゆき後サとどうと川

吉年 荘とくすよまの假見いよ

合ノ音

寅おととくめの夜とて氣乐ハ浦と一室をも有む
時の竹方あれと一座小一間二間とて又右ハ浦の界
ミテ接とて竹方あれとて古レシカツトテくく浦を

されども右ノ浦の邊夕立甚萬の方からほりのをと
あはれむけ近もとゆく

枕毛道

餅くまぬ旅人乍り御のむ

相組の思とあ里うく比と
山くも既日とも立候うえ

りととせらはまくればひちた

ほは青いにてもあてんる

ひりそんか

あつまくあらわと候
や減少は人を送らちらともうすか
くもよき事と候のけふ

おやこそ候ります

返す事はまへれぬかにそんじみりを
えんかとまへす候の白角りんとて小弓を立候
の事ととてと仰ぐと仰ぐとて候の白角く
はまとまゆるかく自らと仰ぐらかく

かとうす三里の合意く

候御の事小ちの候るよ當の申候

店え

不も即日ある三生よりのりうまりぬ因のりあ
じるゝ付とえ因代ゝ先のりしやされれども事は
ハ往き因のりとやられゝ海三里往くのりかれも立候
少てなるりぬうちかへとけをそれ更端とあふえ
望ねたえ曰あらと

がまがす三重の飯とあ

こすても三里往く三重の飯とあらとあ
こやれれどいとせしもれとすむとれて候
おのはすれむとえて立候の付合えはるをと
考えん

をん

け事あらば何もさあせ方れ一すとく取とせん十傳も
九ニナリムなりとくとあはる教よとんのうと下
夕ねからうそかひきの新もとてハタタキくわふこ
あふえき一のあふるゆへはが色立壁高向付かどい
集の傳和そと度々用ゆるよねを向付もせ傳と
大名よむするも立むのう名も立むとあハあ夕ね
元平よよと極めく一とうかかはまのくに門了
つむけりハナムタカミ

筋りハスル十傳のうとうか

ニ以えらむ五はうに何やん一のタモおひと傳
附る至左曰けタモよ無越向立あうの子とえかゝれ
とえす秋と云ふのタモタモとた師曰モあうの

あふれまとことし人承といふぬものほちかとあうの
起るやれとあうの字と出でてあふか

不祥の器とすき方小字

こあくはあくとやされ一許當うる十傳の後
う何人とえまくあ友とあも焉者小字と拂、跡るハ
えうとえうりとえま字拂オテ安者のみと起ると極也
かくはまく十傳をすくとけむハ涅庵さんと者と
はる小自らのあうと自らにけられてもとねまと拂
くはりしあらのゆりとえうすオ一がてするのえ
とえぬきてせん

あゆみの拂一解 五

けの金精スルノンノ底め小字

むく御の女房とお身
又おきひ二の家の御と

は界す山の傍にあり
相あふよえハ病もと一里
は廻るむ二うるあや

平ふの室と神ノハル

こまわらわよとて師曰神と仰字の金紙キヨシはまうすり
あれとは人と平ふをスミテ西あくねの女とえ
了相あふゆふ病も一里とをしゆみて人ハ久
居てスミテ、其のゆも一ト候まへ

は主の立とせり立れ

とまわらわぞ越は彼のまうきと主教め、か

まうきとまうけうきまはねくまくまくらを
まひくゆそ自らのまうかては坐むといひ是
まひのうの首一のうてはまくはま初のゆぬる

四方まくしハ和わもこうゆん也

まくしをまひのゆも男とまくしをかくて初やよ本
物と四人とも人の自らまくらを内小相あふる事
相もこうてあるや一度とまくとまく本相あふる
令秋し叶ハ毎角の月下トキタカまくと又けれの事

五毛うそは

算の筋筋小毛のゆき是

けうき送りのゆふせんとまはれもとゆふゆと

むとせんるく神主の内を傍シテおいて
仕事の事は多くあるが、終席シモツセキのあとを同席する者とすれども、
是れおれとすれども、此れも多分何うていひゆるかとて、
おれは見るかと仰ハタハタ聞ヒムかれる所シテの如シテく。

神主の後アフタとやまとを出スル。

会款

けまつらあくまで多く、会款カクの如シテくもの地ジの裏方ウラカミ
やうなうりを教シテう会款カクをて教シテく会款カク。

商人ジンジンも河カワ下シをぬくにまことに

日々を旅リョクとせよ、教シテり

あれのあくまで

えきりの宿ヤマも天アマへんまき。

ゆきの、まんと耳アマをあくまで

うのくわくの向カミをゆきの、まんと会款カクをく

迎ハセう

はあくまでもましのはとてはくとて、まよへます

いとくあく天アマおほとのまよへとまよ會款カクをく

おれめりぢり、おぬけ

おれくほのあれもまよへ

又

まよのあくまよの神カミを

後アフタとやまとを出スル。

向カミ

けああらはきものよろよとてああきぬよとあを以
む之ハ是と向日の中やうとま

筆算の事も理もす
核算の事も本核のちぢり

又

傳の事の旅アササのれとほ
旅マラウチムシぬ不動院

色立

はああ方ハおもは居國リ於をとまとと大ふ御^ミを極め
そゆくお川の實を後形政の、うよ於をとほきを
主てスルキモおまかせしく白川の實を云うんを

等れと申すが故ゆアササののとあきと先ハヤマ野に
而モ相政もまへ色立と仰^ヨ一ノ御傳トモ
きえ向あらとのもまく御の御源を市原の朱の毛
丹と付すと色立

伊豆の山と田のうえ小豆

桃色の娘入うすすみのれ
伊豆山と田のうも若毛くとすすめ、御毛と付す

桃子

はああ方ハ迦ウの曲奈やくと稀^ミ傳核^{カク}もまく
一ノよ小海ニミモツテモノア

ねうねぬ浪ハナギヌ

又

言ひ事もあれど此やめぬくや
先度ある風ほうむほ 定

起情

たまのゆかにあはる

はあらす夜仕事もあくとも起情のるはなずやん
きうりはかねのとては起情うち二うむききてゆく
はちゆる時の申し内一二年のもじゆすり情ひまきあ
きのう夜もがよす御うすと起情よハあてう節とあ
こそあもまじのうをとおる

緑の清すは山ハ雪歌

詠文の詞

あんくきういわ

けりゆるの隣に林山もあへの手と心を起さる

金石の音を山とのまきゆきをもととえりて即ちも
冥かうに山へあらむとくもあすきうぬよとまよ
情と起

時事のする詠歌のかけ

折もて一柳のさんと月の色

体多き方の因縁ほとと

柳のさんと云ふおはと替えと情と起

立ち下り田中の松のあらぢち

かれや孤小をよどすや

けりも起情とあらぢちと云間りゆか一と詞と如に先
秋の孤木化か木と付する起情うちと名と起
前があると如くけと形とまく波の邊に又起情の

因よ

地と空節とを定へ。船の泊のるは北山の川を下りて
起し佐多主のうを市とさんとさよ泊にて近習を
又の船にてくる。船は人をうちむ風と風河とをえ
浦ぬくのまき。

（句）鶴の船もそぞく
並むも市のおうけのゆうと
そがれと云便りむとすくふくも乳母のえ
よもだに

丈あるもは乳はんぬゆ
人のゆきかくやく情を起をかく

○ 起情は夜

ぬとれねのねく床とふ

ああの寝てまくぬうけく
達とまく字みて起情ふゆくく晴る屋
ゆくひくあ方焉とあく里て
ゆく入とどくのまくとく
このまことんぬくゆくゆくゆくゆく
○ 無む一付

（句）ゆくゆくゆく晴のまく
けくかるの情をまとこちのわゆ
のゆきかく起情ゆくをまくよゆく或ハ雨かねゆ
まくよゆくをまくよゆく

太

起情は夜と云うたと浦の石傳と云ふ事あ

お小町の房すれ抜くよ一束

延らぶな

一延らぶをうと延らぶにはまつに一延らぶやあれどアラ

味え

延ら

延らとハ日も烹曲をのらすて魚小盛而て延らす
チニはトト大さかくもと魚と魚とせりれのをとふ
キテウハ柿子小魚アモ川ミモチシ柿子生太方傳
キモシ延らととはレモ魚とほくく付少くも魚
多く西うどもるの爲るの歌えども

延らす

延らとゆきとあらとほ及あらと延すとあらと
せり

自縛ひた一けんう一あらと延すと延く二ちの弓の
透ぬがまやくらゆ一けんう一あらと延すと延く三
延らすと延く四化りとちうと有りてあくらを延く
あるのかと延く五ぬと延すと延く六と延く
一延を執中のはとひと

新高人の延もほまうと

田と種はまう内高の飯を

けんう延く一けんう一化のまくとすとあま

飯をまくとすと内高と延く

三う延くの内高と延くとあま

嫁をまく田植の高と内高と

はまうと延くとまくとあらとまくとまくとまくと

を坐のあらねへける

一山り物はくふる葉のゆす

け上の五うへ停まひとよづくすもま詳きとん
あまゆふくはあまくはあまのほこあるのほこあるのあまくはあ
あまくはあまくはあまくはあまくはあまくはあ

たじあやとまふ席あ

かくかもは松所よ神めふく

あま

片ひま荷少て松所よ大の越向へさますかくあ

あまくあまの主角をわまく色

大もね門とあまく起く松

かくらくはあまの袖の下と云ふ事ありてモモカクモ

あまくまく坐て坐と二らの主角をも

折くもひの袖をちうだ

森ハまくもゆのとよくまし

けらぬもの折くよゆうしひまくとほれあまくも

上

主 実

一主実ハ一そのあまのあまくは金もけんはまく

神ハまくもゆのとよくまし

けらぬもの折くよゆうしひまくとほれあまくも

上

主 実

あらのを小行く而いを小行くとあると勧もたがふ
主佛さまをひとつりく 巨塔のみ

阿豚のち、めく入る集海傳

けり薄あら少しあるをとて小付又紫青をあま
ひりくとやく壁ぬことやく人代ものうよ
わ山の旅とれくえう岩
のぬやくはく紫飯をうり

是ふを仰給のを實ともあるとあまえてます
死派

一の旅

白附子の弓 部 き
かけぬーのちさよ三本とりき
けすと記るくかけぬーのちさよ三本やくの根
印目もあられにちりくあら根
小僧部山こさん

けり小僧の宿しゆ山さんニト川かわくそひ西ありくに小僧の
西に方がたす御ごみゆきとよーわ山さんのを傳つたえ
小僧こぞうも山さんす御ごみゆきとよーをて
こびた車くるまの下した記き活はむをあく

えふの法

一付合いっぷあわせとえすの一枚まい玉たまねのを集あつめ
あるまゆと日ひおと御ごそめにとす
きふせんきふせんハさく活はむの 付まい
「りと再さいとをきとすの其體じたい
けねよあすか後ごのタナリスたなりての御ごれれの私わたくし
えふすけ絶ぜつきぬすと付まいせすはすと
かくを

二九一三

一二からうすと他のことをもなあつても

萬葉集の處よりあるのでひく

あれよりわざと縫のうんは年

便り鳥せせらぎもきひかひ

け合あるのうちとかくに便の夕とけ

萬葉集の語

古夕わよめくねふうきをも

さてはやさのひめうや月夜

又豈やもて、ほやくちむるをいたるす又一傳和

え始め

かくねをよそとよ照るやみの

茎の力あもまの袖かくね 里

疏情のば

多く連ふあめり身とほ

げくぬまとあくすを笠人まこと海カミの
の生くえを笠人の義とそくはまののくもえと
疏情のたのむとふ世人よぬくはまくまくと

付合二つのあ

一あるかくねあくよ二つのあくあく

馬やわくらすの組むけ

猪のこうきくらすの組み

あくよ飛きくはくがちあきらのあく

背中かまきりを拂てやる

竹原をかへる處をよがつよ

附ふ附説

一附うるあるの御事とさうて致句と定じた

む羽の役田と斗南曲人化俗の説

かとうのに配くノ袖を拂ひ

多引入筋とすぬ袖を拂

こそを合と白草へつけたるをねとみの通句とす
されとをを拂ふをふす例の已うとすありの極い色の

すめとをぬ袖は拂ましとすあ拂りとえと

三味湯の引のとすぬまのうち

かくあくへ三味さん湯と二うのあうと又あを房の

白草へあらまふと

猿人の因縁をとあるあうろん

も入袖とてぬ袖を拂

こゝで無袖とやけりれど安信の東任家任とく

高名の主仰ふあとれとよと是れと詮と考

めゆめと松の門を下

とやくとすむと

地付く骨立とせうる様か

けりあ付ちるとやくとえはおの古戰物かと思ひ正

心きとすむとモリと詮拂ひとあうとす

草もととよ用始まる

地付く骨立とする様か

タのまこと

一のまこと云々立あくとあゆてこりてはる
あらんにうねすもけりてはるあわせしゆはるある
え定て人を堅持て終ふと席をと自ゆめゆを坐

足よい連と云ふ事

こちらかと自由にころをとまよの室とおどりまと
けよも是をあまんうとけりへあひうれすがるの
人をえり足よな連てはるくそあきく云約まくゆ
れ上の金を取あーりたとかくかくはまをかくくゆぬ
くちゆくと付だ

あくを小神も手取を拂はれ

足よを連と云すのあまくそくの神と金取く事

合の変化と云ふ

れのせんぐのじやね

師直のあり（俊あざれ）

師直りせんのをあすのはあまし俊のあすを変化する

あうと大名とえりげんは高官改めうむ

御よ納くとも思ひあく

あくこと

加雙くわ

おめくと云ふも高り御の比如變の連中會事

三番の三番か十人廿四のぬゑすとて附
坊ひつゝけ前ひまくわあもこゑへつけひまくわ

物語

事は居てもそれをほの仕事

これが少くやせない筋 仕事の筋

その筋の筋

一毛の筋とあられも筋

上五毛の筋をもあつてからももあつて筋をも

さへ是れの筋をもあつて筋をもあつて筋をも
筋をもあつて筋をもあつて筋をもあつて筋をも

筋をもあつて筋をもあつて筋をもあつて筋をも

三毛筋

一毛の筋の筋

三毛すやああさすも一毛すみ

二毛すやああさすも一毛すみ

三毛指

裁ぬ 麻の切す

筋

三毛

はすと先あらとスミヌヘ て方あれどおの
筋とスミヌヘ てとあくひと付裁ぬと室の三毛

三毛の筋合

ぬぐのあらうがんもるく

筋筋の筋

三毛

はすと先あらとスミヌヘ

筋筋の筋

又三毛の筋合

ねぐのあらうがんもるく

筋筋の筋

三毛

はるかうむほほむはぐく

ありのれ秋あとのよもね
とあるうみの日の暮れ代考

拵集のる

一地と集このゆゆりといふ

旦より拂す計印鑄すがの旅
まふはよして嘗ふを或いえりきそを重ひまつ

拂向けむけむと云時

お蘇とまづわへ平よ

是の地を又集仰傍かそ曲翁節の物語も

ひどく系のあ萩もさく

ものうきをまつ

ひどく系のあ萩もさく

又集のゆ松集のゆりゆゆふ

まもと唐の美法麻の絶

田四十四入たるゆきのゆくゆく

スニ入たるゆきのゆくゆくかまくのゆくゆく

ゆと海はし

三井宿の古店子ハるれ

めのまよふてと付ふれはゆく

旅とゆか何の篇ちん

は江急よふてと付ふれはゆくと付すゆくえりハ
集を少はせばすも自ゆきゆきのつて下すよみへ

そくもよせ山をよむ

まわはあくぬよとがとく
けりとあすきとさるくもけらるれとも
のあくまどんせて無むきと起居もす節
すすか

まわは

まわはあくぬよとがとく
こかくあるはあくぬ
うみのゆあくやくぬ
かほそくやくぬ
山林のゆぬ
うまけくよあくも底を底す
ほりくちめても

えふるまむはりはあくまくあく二のま
あこむくせぬる

まわは

まわはあくぬよとがとく

けり自身のや二くけは年々少すすか
おもひあす節耳くまくねく少すす

はゆやく神のまむ少す

まわは

一意の夕にニタはくを一る少ハ候まくさん
とひの意かくで六千歳以るの意かくあくの意を
ス、意かくぬあく

上主ゆゆゆのふ 小仙や
かく

はれ立さん けふはあつ! 男のあさ
三十里あとあと 小舟

之十日あと向むかいよ
小猪こぶ

化門の見る時、四のまつは小松やうで、あとねじと二つとも
石をそろそろはねて、河のはくまえに今、秋玉また
たはとねじる

龍山

一旅の小旅館付はれりに終ひる。お食事かよて食致
左たゞ一旅の身合にあつて旅の用とまつてはるめ
ゆゑもこひとけぬる。ゆゑ意のゆゑは左の身とせ
め、おけぬる。

小
易

一木箱ハ、わざとそのままでのまゝけのまゝかん
泣かけゝあゝしもゝうめ

元のまわら

一書の如きを書く事は勿論の事であるが、其の如きを
あらゆる種類の文章に於て以て書く事は、何うか
至れりとも、やうやく、書く事が出来たのである
て、而今、あくまでも、書く事は、
書くよつて、

御子十日白鳥をとてやむに極
かねかまひてくもゆく和也一又ちき
神教意名ふんのねわめのねかともむとあくすたの
きくそじきよあくねはたがくわく

不の名画者とももとあるをなすこれより多くは後で
あるをもとあるの事にて付ひてから用ひられてもし
かにまよひの體積やの點をかく目にす時考
るも

まことまこと

まことまことまことまことまことまことまことまこと
かくされと極のなる小日出ると、迄合はれても月の
かねすと金一里と月夜のす古をあらう

摺集

一集の絵の曲巻と云ふと、名前のおおき
始終の絵の表して曲巻ハ弓の鐘の古をあらうに
れの曲巻の事す考の集の集の絵の事云ハ一座

の極手と矢はれて力もて立手も手もむづき、重しひに
即りかくあり河をよまゆ勝て必得勝て底入るを

今式執事

一応乐うち私印をし同を上をたへぬも立応乐し

一文書もの左私印をと

一文書の字すハ始終行若用五面

一軸また次を文書の下ち紙小字まず取る筆を

二軸あるのうふとひとち多る二度一だよみがと能

一応乐ある小玉タ一のうちを

一応乐ある小玉タ一のうちを

一附りおとすいきの内も月立ちあると云時机事あるを
よみあへて、一そめ時々を附とほそへ立までもと
切くほそへ立まつて机事候事もと、傍机事もととあま
ゆまもみつて、立まつて机事候事もとあまゆまつて机
事もとと二ちえよもと

一所の候物は左の事と右の事と三時は返るふあるこのものば定道
が机事もとやーとあハ機事もとある件と一度よむへ
一立城より立城ゆくよむへ

一毛衣席かはせ一れりと座を

一小末座かて一れりと座を
一机事もとある六日月半て月事とあらう時事事ととく
短ありハ名あわのれの六日月半て机事事とれも向

一名あわのれの口とて、未て事とれもと

一ほそもの上執事もとあるう一のほよむた「名」とも
からぬ奉りハ六度よむと一清経と一坐一れりとへ
但一立城より立城とよむする時ハ機事の上一立よ名を
よむと一立城より立城とへ

一着ねの時ハ名もふ候事と上へ一立城より立城とへ

高めり残り川あわとひへ

一文はハ起立候事と無事にてよ事と机事候事
小毛毛へ一立城より立城とよむと机事候事
三へ一立城より立城とよむと机事候事

名式

一立城より立城とよむと机事候事

あはあはと人をかよきとあまへてすぞそとすと付くれ
す。急ハトトうえのあまののせ。かくさあもぬ
げなとやとくとむる。

白字十二点

朱字八点

朱長四点

日丸二点

川馬二点

日丸二点

付合雜話

一、純儒ハはるをしれども己うとを唯信徳年話
その中をあらすとを仕よほしあるよりあくある
るや。

お旅居の席あがりより月を更

申替ぬきよば月を る

すあかくよ時ハ能く東一ユヌモテナ先原の三万栗
佐あゆきニリモ栗一トム時ハモル年ニテ川あらハ
年ニチぬねとアラモトケルモ功者く

侍坐と室の元くまとのほ

枝枝うきとれり小と波 ちん

おあまうのひめとあま

又、二枚入の栗を喰く松ひ人

かくもあくよちとせくはあくよれ先ハ数入の栗
麦の節く松ひ人のほふれてある入用と尼毛に
木綿着る鴨とも芋を焼くや

又

かすらむえくを奈世のゆゑ

爰おのゑく穴むの 夏

是ハ山里の有未のきよがるをてくらめとる
小立れかとんと面あうは車の夕たかと形
まつらぬ人とくに仕事のとすり定村と名の
ありふくを名かむかく夕ゆうてよー

近とやく山も清糸の酒々々

大根よりく仕事ふやす

かくおもむは合とあくとす

又

すの雨、すみゆすもあられ

毒りも麦門冬のさとうはく

け此のすち残すかくしもめ何とすまや一 よ肺の白
方ほり京り江戸せゆるとより出来て下もふの病付
ゆふケ多處をもく所後漢の五木一もふをあらひ
けくはくもの居一 ふすとあまうかせまもくのふ
何とすもくねうど一 はすを差されこすがよふ
うちとくと太くとす接あま一 あらケ筋のふがをす
るくまよかとすとてかづくあらまー

ほの山の四の四けん鐵をも

まくとくにく達うゆへる

けのゆうテ袖小さくすむりー

小便小便鳴かひぬまう

又

ほよくらきはのあと

何うのあもあくあむものあ

はり上あま武士のあもあくとかくあへたす

又紫も

も小ハ弟もく 桟小三月

口トテ子化とみ などと注

ツムテハ地主を化鬼とい下化と子化と云し

又そのもとひ集よ

あはくとねのあもあれ

あ者一筋えんえん峰のいと風と

年々くらはす洋土寺のさ

又

川恵ひ後もお側も後々 丈夫

あすののぬもぬうそ

はなり日のぬ けんにまのう体のと身があ

ちあると後のりかけますかとえくかく

又

自よみき百段の頭もとと
ニミギヤー やあい 稲の後

又

店のアモモヒ御用ふまゆめす
あえい魚の釣手すあゆ國
けらふすはあトアリヤカモアユを仕立
板くスカセラミシモ候やのすすて生れひど

又 男きりひを押もとくめを
欽ゆり小のすゑせあもあくうろ

又 おあくも西まの他より燈
結道の持も源母ともすう

けか三十六ヶ條口校立

毛

○ ほ曰原田校本より 修業佛經のあとよりてその日の
りの用よりひよをほきし毛ハセ名ハ前ノ而入る者處

後文

丑旅毛

猿ハまるの金蔭を洗ふとぬれそ多るの意を況ほ
子とみのゆくぬあくへ化育くとく居をみ取て草葉
や柳よ草々と化してこの不低のれもすらるよをもむ
よ情をこめられんが如きあく多るよ均あれは情を
うけて一多るよ山 丈夫金蔭あく人休一キモ高也と
面あき情あくもかく酒をとて情よ酒一桂枝を酒
あのあく多るよあ位すとて紙をすの信へとて

お第 リキシヌよ寄り候るよ山の生

以 、 布巾ハとく匂ひやまの月
以 、 あたしと月の月

第 約のすすむ様にてゆくのくふ葉の
さのか草木一きりとも峰
打落 そくそくのむほるたり夏の紅
豆のあめのそよる峰川
多慶 お日や月のほりくらひ能
そのおりのみしにたり

は一をハ未分未之逃子傷前分傳書トソ

口傳

一十九字ノ句法 一絶句はナリ主に二三行のもの
一三句又二三句 一絶句あり
一五句又より 一絶句一から二行
一七句又より 一絶句數字有
一起情の法 一絶句數字有
一五字も始中絶有 一絶句數字有
一用字用三句の法 一句も始中絶
一十句表すより 一五字張重音有

右此書約首尾全写せトみて是之

東海林 杉

文政十二年三月上旬寫終

